



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

ゆいまーるの心で
あらゆる絆を深めよう！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

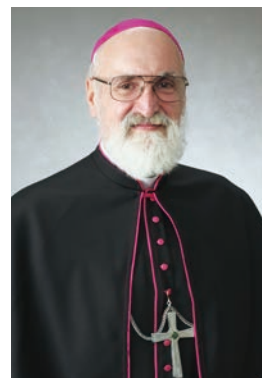
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2021年11月1日(毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第756号(11月号)

秘跡が目指すもの



カトリック那覇教区
ウェイン・バートン司教

うちむがな

兄弟姉妹の皆さん、コロナ禍で多くの苦しみ、悲しみ、不安、不自由によるストレスを感じておられることと思います。私自身この長引く重圧のなかで病を患ってしまいました。いくら心で頑張っているつもりでも、身体がついて行かず、正直に反応したのだと思います。その重圧の中身はというと、やはり私の責任下にある教会や学校等における感染リスク、信徒や子供たちの健康・安全と霊的サービスや教育・保育サービス提供のはざままで迫られる判断などで、寝ても覚めてもこうした重荷から逃れることはできないのだとも感じました。

また、わたしたちが最も大切にしてきた秘跡の執行はどれも、感染拡大のリスクという面からすれば、最もリスクの高い手法と判断せざるを得ないことにも、何とも言い難い不安と危機感を感じています。それは、秘跡を信仰生活の中心に据えてきたカトリック教会の存在意義が根底から問われるほどの大きな問いかけで、今後の教会存続の根幹にかかわる永続的な課題に突き当たってしまったと思えるものです。

七つの秘跡は何れも、集い・触れ・ことばを発することによって成立します。その要素となるいづれの行為も感染防止の観点からいえばアウトです。それでは、これまであまりにも秘跡ばかりを重視しすぎた教会は、もはや本質的な活動を実践できない存在になってしまっているのでしょうか。それに代わる手段はないのでしょうか。近代的な通信機器によるバーチャルな手法によって行うことは出来ないのでしょうか。残念ながらミサのライブ配信や霊的聖体拝領は出来たとはいえ、秘跡そのものではなく、秘跡に代わり得るものはありません。

一、秘跡の目的を見つめ直す

では、わたしたちはどこに活路を見出せばよいのでしょうか。

後、の神と共なる人生の歩みなくして、信仰生活の出発点としての洗礼の恵みは実を結ぶことが出来ないのです。

また、いくら洗礼の恵みに浴しても、人生を神と共にイエスのように歩むことに数々の困難が付きまとうことは避けることができません。十字架の死にいたるまで神に従ったイエスに倣おうとすればするほど、私たちは自分の弱さや罪深さによる数々の困難から十字架を避け、道を外れてしまいがちです。主イエスの後に従って御父への帰路を歩むためには、常にどうしても「ゆるしの秘跡」を必要とします。何度も神を避け、道をふみはずしても、このゆるしの秘跡によって再び神への歩みに立ち戻ることができ、さらに御父の前に弱い自分をさらけ出し、許しを請う訓練を積むのです。

また、信仰の旅路を歩むために欠かせない糧として「聖体の秘跡」が与えられました。この霊的な糧を食することなくして霊的な歩みを続けることはできないという意味で、非常に重要なのですが、あくまでもこれは旅路の糧であることを忘れてはいけません。ややもすればわたしたちがご聖体を頂くことばかりに心を向け、これを目

的にしてしまいミサへの参加と聖体拝領で満足して、その本来の目的であるキリストと共に生きる「キリストを運ぶ行動を忘れてしまっているのではないでしようか。もし、ミサやご聖体を本来の意味で大切にすれば、派遣（ミサ）されて出かけた先々で、食した糧（エネルギー）を使い、目的（ミッション）を果たして、再び霊的エネルギーを補給するためにミサに与るサイクルが生じるはずで。

この派遣を強く意識すること、より秘跡の重要性も増し、秘跡本来の効果が発揮されるはずで。神の恵みを使うことなく蓄えるばかりでは、やがて霊的肥満の状態となり、霊的な健康をかえって損なうことになりかねません。

主として霊的糧であるご聖体を分配するために備えられた「叙階の秘跡」にしても、その本来の目的から派生した司祭職の尊重に重きを置きすぎると、聖職者主義という誤りに陥りかねません。司祭職に就くということとは、目的であってはならず、その先にある福音宣教とすべての人への無条件の奉仕がなければその目的が果たされることにはなりません。その他の秘跡、「堅信」「結婚」「病者の塗油」

もすべては、神に向かう歩みである信仰生活をより良く生きるための大切な道具であり手立てです。けっして目的ではありません。

このようにそれぞれの秘跡の意味や目的を深く突き詰めていくと、おのずから秘跡の執行でできない、あるいは秘跡に与れない場合でも何をしたらよいのかが見えてくるはずで。このように秘跡の目指すものを切に追い求めるとき、これまで以上に秘跡を尊重することになるのだと思います。秘跡という事柄にこだわるのではなく、より柔軟にしなやかに信仰を生きることが大切なのです。

二、成長する神の民の姿

それぞれの置かれた場で何が神の御心になうことなのか、あるいはそれぞれの立場で何が求められているのかを一人ひとりが問い直し、秘跡が目指すものをそれぞれが追い求めることによって、これからの豊かな信仰生活のかたちも見えてくるのではないかと思います。そして、そこからコロナ後の新しい教会（神の民）の姿や聖霊の導きを感じ取ることが出来るのではないかと思います。これまでのよ

うには秘跡の執行が容易でない中、秘跡の授受に固執するのはなく、秘跡の目指すものに目を向け、その目的になう生き方を模索したいものです。

去る十月九日にシノドス（世界代表司教会議）の開幕がローマで宣言され、十月十七日には全世界の各教区レベルでのシノドス前会議の開会が宣言されました。この二年間にも及ぶ世界会議は、世界中のカトリック教会（教皇から全信徒まで）が共に歩む旅とされ、単なる話し合いの場ではなく、「聖職者主義と硬直性の誘惑に直面する教会が、あらゆるレベルで、互いに耳を傾け合うこと、その司牧的姿勢だ」（二〇二一年九月二十日枢機卿顧問会議）とフランシスコ教皇は強調しているように、すべてのカトリック者が参与する旅の道程であり、教会の協働性を体現する歩みであるとされています。

このような教会本来の姿に立ち帰る歩み出しは、様々な災禍や苦難を過ぎ越して成長する神の民本来の姿そのものを示しており、わたしたち那覇教区でもこのような歩み（分かち合い）が共になされるよう求められています。わたしたちもこれに合

どのような形になるかはまだ検討を始めたところですが、コロナ禍の中でいろいろな制約を勘案しながら可能な範囲で実施することとなります。この機会に是非アフターコロナの教会のあり方、刷新、再スタートなどをテーマとして知恵を出し合って、今後の教会（私たち）の成長につなげて行けるシノドス（共なる歩み）となることを希望いたします。皆さんの祈りから生まれる意見、信仰生活をより豊かにする知恵、そしてさら

に教会を生き生きとするための要望・提案などを分かち合ってください。そして、地球儀の上ではコメ粒ほどのわたしたちの沖縄でも働かれる聖霊の息吹を見出し、世界中の教会に素敵な提言のプレゼントを届け、神の民の一員として共に歩む旅（シノドス）に参加しましょう。

二〇二一年十月十八日

カトリック那覇教区

ウェイン・バーント司教

御 礼



去る 10 月 3 日に行われた「ラサール神父を偲ぶ会」には多くの皆様のご参列を賜り、誠に有難うございました。コロナ禍のため、葬儀は司祭、修道者のみで行われましたが、機会が叶い、ラサール神父様と関わりのあった方々とお別

れの集いを持つことができ、故人も喜んでいただけたと思います。あれこれ至らない所も多々あったかと思いますが、共に祈りいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

カトリック那覇教区 ウェイン・バーント司教



ロザリオの祈りで 天国に導かれて

ヨセフ・ブイ神父

泡瀬教会 主任司祭



中で繰り返すことが多いでしょう。そのような時、最も適した祈りがロザリオです。

聖ピオ神父は「ロザリオは武器の心を開く鍵です。私のロザリオの祈りによって願った恩寵を、聖母は決して拒絶しません」と言われました。

十月も過ぎ去ってゆきました。十月はカトリック教会で「ロザリオの月」と呼ばれています。ロザリオの祈りは、昔から多くのカトリック信者たちに愛されてきた祈りです。

私たちは毎日の生活の中で、いろいろと祈りたくなるときがあると思います。大切な試験の前や、病気の時、また何か困難にぶつかったときなどに祈りたくなるでしょう。そういう時、何かむずかしい言葉で祈ることはあまりないと思います。ただ「神様、試験がうまくいきますように」とか「神様、早く回復しますように」などの言葉を心の

ロザリオの祈りは、イエス・キリストの生涯を黙想しながら、私たち一人一人の心の母である聖母マリアに心を合わせて祈る信心です。イエスのご托身を観想すること、そして、特に主のご復活の神秘に一致するため、主のご受難と死の神秘を観想すること、これがロザリオのすべ

です。ロザリオは、私たちの信仰に関する本質的な神秘を黙想させ、マリア様を通して、イエスの深い知識によって天国に導いてくださいます。

聖なるロザリオを信仰深く、心から祈れば、私たちはマリア様の汚れなき御心にもっともつと入っていくことができるでしょう。そして、この最も聖なる道を通って、イエスの至聖なる聖心に入っていく、そこで永遠の幸せを見いだすでしょう。

今は、もう十一月になりました。十一月は「死者の月」と呼ばれています。私たちカトリック信者にとっては、祖先の方々をはじめ、亡くなった父母や親戚の方々に恩がえしをすることは、人としての正しい道です。それは神様の掟です。

実は、亡くなられた人々は、自分のために何もすることができません。彼らは、神様の与える慈しみと恵みを待っています。そこで、彼らのために神様に祈ることが最も必要なのです。だから、この死者の月に、死者のために善い行いをし、ロザリオの祈りや、特に、ミサを捧げることによって、亡くなられた方々に感謝と尊敬と、そして愛をあらわしましょう。これは一番大切なことです。

ここでロザリオの祈りについて小さなお話を紹介しましょう。

ある日、天国でイエス様はベトロに聞きました。「最近、天国には人が増えているようだが、天の門を開けたのですか?」。ベトロは「いいえ、私は完成された人にしか、天の門を開けていません」と答えました。ベトロはヨセフ様に天の門を開けたかどうか、聞きに行きました。するとヨセフ様は「天の門のカギを持つているのは、ベトロ、あなただけです」と答えました。

次に、マリア様を探しましたが、見つかりません。そこに一人の男がいたので、マリア様のおられるところを尋ねると、彼は「知っています。マリア様は、私を天国に入れるようにしてくださいました」と答えました。

ベトロは急いでマリア様を見つけ出し、「天の門を開けたのですか?」と聞くと、マリア様は「はい」と答えました。

そして、おっしゃいました。「私は、地上にいるすべての人々に約束したのです。毎日ロザリオの祈りをするなら、私がみなさんを天国に入れてあげましょう」と。「だから、私との約束を守った人たちを天国に入れていたのです。」

この話は、ロザリオの祈りの力を表す興味深い話です。ロザリオの祈りは、優しい祈りですが、とても強い力があります。聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、ロザリオの祈りを「再発見されるべき宝」と表現しました。

聖母マリアが、ロザリオの祈りを唱える人と交わした約束は、「ロザリオによって結ばれた仲間、生きていた時も死んだ後も、天国の聖人たちと親しい交わりを持つことができる」と教えています。ロザリオの信心は、天の国に入る約束の特別なしなのです。

ベトナムの尊者F・X・グエン・ヴァン・トゥアン枢機卿は「希望の道・牢獄からの福音」で「聖母への愛は、ロザリオを愛している人たちによって明らかに示されています。マリア様を愛している人だけが、繰り返し飽きることなく、同じ話と同じ語句を唱えることができるのです」と書いています。

どうか、ロザリオを愛し、ロザリオを生きましょう。神の国を広めるため、天国へ行くため、愛する家族のため、汚れなき御心への信心をもって……。

「ロザリオの月だけでなく、いつでもロザリオ」を唱えるように努めましょう。

2021年10月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2021年10月5日(火) 10:00～12:30、安里教区センターにて

1. 報告及び連絡事項：始めの祈りはナビーン神父、司会はクレーバー神父が担当。

- ・前回(9月会議)の議事録の確認を新田が行い承認された。
- ・「ラサール神父を偲ぶ会」についてウェイン司教より報告が行われた。コロナ禍の昨今、偲ぶ会の開催も含め様々な苦労があったことを、ラサール神父の施設での様子や主治医の先生のアドバイス等、開催までの流れを時間の経過と共に説明と報告が行われた。多方面からの協力を頂いて、開催の形も通常とは違うものとなったこともあり、司祭団の意見も聞きたいとのウェイン司教の要望を受け、押川名誉司教、カプチン会地区長のマキシム神父をはじめ、様々な感想が述べられた。最後にウェイン司教から、ラサール神父の遺言として、「自分に対する全てのことを私は赦しているし、気にしていない。むしろ私が言葉や態度で傷つけてしまっていたなら、それを赦して欲しい」と伝えていたことが報告された。
- ・ラサール神父の帰天を通して感じ考えさせられたことの1つとして、教区の司祭たちには、自分が帰天した際の要望を前もって伝え、文書にして残しておくことも必要ではないかとの意見や、公正証書の活用、教区司祭たちのお墓を1つにまとめた方が良いのではないかなど、司祭たちから様々な意見が述べられ、必要に応じて教区としても対応していきたい旨述べられた。
- ・「カリタス・ジャパン全国セミナー」について、担当のマーシーさんから説明があった。11月3日(水)オンライン形式で実施され、誰でも参加でき、また那覇教区からの発表もあるので、小教区でも呼びかけて、参加を促していただくように要請があった。
- ・教区事務局長の津波古さんより、全国事務局長 Web会議について報告が行われた。会議は事前アンケートを基に協議が行われ、10月17日(日)にシノドスの開幕を宣言するミサが行われるよう申し入れがあったことや、2022年待降節から改訂される予定の典礼文について、事前に慣れておく必要があるなどの確認が行われたことが報告された。那覇教区ではウェイン司教が17日(日)の開南カテドラルでミサを主式して、シノドス開幕を宣言することが報告された。その他、中央協議会分担金についても報告があり、コロナ禍の影響もあり、分担金は50%減額されることも報告された。さらに、典礼の移動についても報告があり、「世界青年の日」が今年から待降節第一主日に、「洗礼者聖ヨハネ誕生」の祭日が、来年から6月23日に移動となることが報告された。
- ・かねてより要望のあった司祭・助祭の宿泊研修については、感染状況の好転によって可能性を探ることとした。ただし、12月以降は一般的にも典礼的にも多忙となるため、11月中に可能なら実施するが、それ以外の時期となる場合は取りやめとすることが確認された。
- ・その他、新垣助祭から杖を突くようになって、祭壇に上がり降りするのも大変で、会衆席からミサに参列しているが、それでも良いのかとの問いがあり、司教から決して無理はせず可能な形で助祭として役目を果たすよう要請があった。

2. 審議事項

- ・緊急事態宣言解除後の教会活動について、津波古事務局長より報告が行われた。沖縄県は10月中独自感染防止措置をとっており、緊急事態宣言が解除されたからすぐ教会活動を元に戻すということではできない。対応は各主任司祭に任せるが、10月一杯は慎重に進めていかれるようお願いしたいとの要請があった。
- ・マーシーさんから司教日程について調整が行われた。10月の公式訪問について、10月3日が小禄教会訪問。10日午後3時～与那原シスター達への講話、17日、開南教会にてシノドス開幕のミサ、24日石垣教会、31日宮古教会訪問予定が確認された。11月は日程に余裕があり、コロナ禍で訪問が中止となった教会への検討が呼びかけられた。
- ・教区シノドスについて、ウェイン司教から報告が行われた。教皇による開会宣言後の10月17日に、シノドス(世界司教代表者会議)前会議の開会宣言が、地方教会(教区)でも行われるよう要請されている。公会議後のシノドスがスタートして50年を迎え、司教たちだけではなく、すべての信徒に呼びかけて、シノドスを全世界の教会のあるべき姿と捉え、”共に歩む”ようにとの教皇様は呼びかけておられる。準備文書にもあるように今回のシノドスは、2年の期間をかけて、「ともに歩む」、「ともに旅する」教会の実現を目指している。いま、いろいろな意味で教会のあり方が問われていることを重く受け止めて欲しい。ウェイン司教の報告を受けて、押川名誉司教からもお話しがあった。本来のシノドスの原点に立ち返ろうとする取組みであり、教会のあるべき姿に照らして集い、話し合い、共に歩んでいくことが求められている。難しく考えないで、それぞれの小教区が抱えている課題について、率直に意見を述べ合い、検討して、共に歩んで行く方策を見出して欲しい。その過程そのものがシノドスの本来の意味なのだから。
- ・その他
- ・マキシム神父から司教への信心グループについての質問があり、司祭間でも討議された。ウェイン司教からは、教区内で活動する様々な任意の信心グループについては、指導司祭の任命などを教区として行なっていない。任意の信心グループについては、それぞれの司祭の自由な意思に基づき、司教の許可を得て指導的な立場で関わったり、活動することは可能であるが、教区の下にある運営組織体ではないので教区が直接対応すべき問題ではないとの返事があり、任意の信心グループによる教会堂などの使用等については、主任司祭がその可否の判断はすべきものであることが伝えられた。
- ・次回司祭助祭拡大会議は2021年11月2日(火) 午前10時から12時、教区センターで行う予定であることが報告された。

2021年10月18日 承認：ウェイン・フランシス・パーント司教 記録：新田 選

私には、八人の孫がいる。これは、初孫の幼児洗礼の思い出である。母子共に産後の疲れも癒え、赤ちゃんの首も座り抱きやすくなった頃、そろそろ幼児洗礼を神父様にお願ひしようと思った。

ある主日の御ミサの後、「神父様、今度初孫が生まれましたので、幼児洗礼をお願いします」と申し上げた。次の週、「私の孫の洗礼式の日程はいつがご都合いいですか」とお尋ねした。二週に渡り、神父様は「はい、はい」とだけ仰り、足早に過ぎていかれた。祖母の私としては、「おめでとう」「良かったね」と仰って下さるのを期待していたのだが、いつもお忙しくされているので、目を改めてちゃんと約束しないといけないのだろうか、神父様のお立場は、信徒へ個人的な言葉かけは禁じられているのだろうかなどと自問自答を繰り返した。可愛い初孫が洗礼の秘跡を受け、一日も早く神様の子どもにしたい焦りを募らせ、三度目のお願ひをした。すると神父様は、「親も教会に來ないのに」と仰りながら通り過ぎて行かれた。紛れもない事実を言われ私はハッとした。と同時に二度も神父様にお気を遣わせてしまったと申し訳ない気持ちに

なった。折目正しく氣真面目な神父様の、信者教育の一端だと思われるが、当時の初孫の父親である私の息子にとつては厳しいものだった。新しい職場に入ったばかりで、毎日三〜四時間の睡眠時間しかなく、日曜日は丸一日爆睡状態の彼に「御ミサに与りなさいよ」とは、とても言えなかった。親が無理なら祖母ではいけないのだろうかとお尋ねしようと思つたが、神父様のお言葉を今一度受

たて軸よこ軸

初孫の幼児洗礼

開南教会 中村 光子

け止め思いとどめた。

一年が過ぎ、二人目の孫が誕生したが親の所為で洗礼を受けないままだった。それから数年が経ち、二人の姉弟は近くの保育園を経て愛児幼稚園に通うようになった。その頃、新しい神父様が赴任され、その神父様にお二人のシスターと私が呼ばれ、「具志頭村の教会に行つてみなさい。開南教会は具志頭村に教会と墓地があるのにその地域の信者が一人もいないことは淋しい事です」と言われた。その翌日に早速、シスター方と私の三人

で出かけた。

具志頭小学校の校門近くに立ち、下校する子ども達を呼び止め、「心のともしび」や御絵を手渡ししながら、具志頭教会の場所を紹介したりと毎月一〜二回通つた。

具志頭へ向かうある日、車の中でシスターに自分の悩みを打ち明けた。私の二人の孫にまだ洗礼を受けさせてないのに、他の子ども達を誘うなんて神様に申し訳がたたないのではないかと話すと、シスターは、「洗礼は神様の恩恵によるもので、人間の力だけで叶えるものではないのですよ、神様を信じて祈つていれば実現しますよ」と仰った。

初孫が年長さんになった頃、シスターが仰っていた事が見え始めた。次男嫁が産休を利用して、公教要理の勉強を始める事になった。それを聞いた初孫が、「私もお姉ちゃんと一緒に行きたい」と言つて、毎週、神父様から神様のお話を聞くようになった。祖母や他の大人から勧められた訳ではなく、自ら洗礼の準備を始めたのである。これこそ神様のお導きであり恩恵によるものである。神様は、この時をちゃんと待っていて下さったのである。

二〇〇六年四月十六日の御復活祭で、初孫は乳児の時叶えられなかった洗礼の賜物を頂く事ができた。これは、彼女自身が神様から愛され頂いた大きな贈り物

である。この初孫のお陰で、第二人といと二人の計五人が一緒に幼児洗礼の秘跡を頂く事ができた。祖母の私にとつては待ちに待った日であり、長い間の胸のつかえが取れたような大きな喜びと神様への感謝の念で一杯だった。

神父様をはじめ、シスター方や信者の皆さまから孫達の洗礼への祝福とたくさんのプレゼントを頂き、家族みんなで喜びに溢れた。生涯忘れられない大切な思い出である。

神に感謝。

Book カトリック文化センターからお知らせ

2022年カレンダー、手帳の店頭販売開始

いつも文化センターをご利用いただき有難うございます。今年はコロナ禍の影響もあり、バザー等の出張販売はできなくなりました。それに伴い今年は例年より早めに2022年カレンダーや手帳等の店頭販売をスタートいたします。是非ご利用下さい。

◎キリスト教関係の書籍、宗教用品等のご用命は、「カトリック文化センター」を通してご注文下さるようお願いしております。
〒900-0005 那覇市天久 1-8-7 問合せ: 電話 098-868-4649 (崎山・新川)



WALK WITH FAITH IN YOUR HEART AND YOU'LL NEVER WALK ALONE

Sr. Ivy B. Bayno,OND

It has been almost 2 years since we battled against this Covid 19 pandemic. Until now it is still an ongoing problem worldwide. Some of us have been affected by this pandemic, but we need to move on despite the challenges it brings.

We are grateful to those people in pharmaceutical companies who really did their best to make vaccines to fight against this contagious disease. We are filled with gratitude to the medical workers and frontliners for sharing their selfless time and love to the patients. We are thankful to the Japan Ministry of Health personnel for all the encouragement and assistance given to us for the expedite schedule of vaccination day. We are grateful to God for the opportunity that we were vaccinated. Indeed, we are all responsible to take care of ourselves and the lives of others. As Pope Francis said, “Vaccination is simple but profound way of promoting the common good and caring for each other, especially the most vulnerable… getting vaccinated is ‘an act of love.’ ”

Many of us have lost our loved ones, relatives and friends in our native land, even here whom we have known dear to us because they were infected by this disease. They were not able to overcome the effect and save the most precious life given by our loving God.

The situation led me to remember the song taught by my grandmother when I was a child. This song was etched in my heart as a meaningful gift that I received. Whenever I am facing storms in my life, I am moved to sing this song, wherever I am.

I do believe that in every disaster, there will come a time it will end; that in every trial we experienced, there is always a solution to it; that in every darkness, there will be a light to come as long as we anchored ourselves to a loving God who walks with us.

As the Season of Advent draws near, waiting for the second coming of Christ, we, as pilgrims on the journey are encouraged to continue to be hopeful, to deepen that faith within our hearts because we are not alone in this journey, God is with us, the “Emmanuel” . With hope in our hearts, let us unite in prayers that this Covid 19 pandemic will come to an end.

Walk with Faith in Your Heart

by The Bachelors

Walk with faith in your heart
And you'll never walk alone
For with faith in your heart
The world is yours to own

You never will grieve
If in Him, you believe and
Walk with faith in your heart

When the dreams that you dream
Seen to disappear from view
That's the time to hang on
And soon they'll all come true

He'll lighten your load
As you travel life's road
So walk with faith in your heart

*Whenever you have troubles
Just reach out for His hand
Keep by your side
Your constant guide
And quick to understand

You will find happiness
If you let Him be your friend
And you'll find your success
Is just around the bend

He won't let you down
Wear a smile, not a frown
So walk with faith in your heart.
(Repeat *)
In your heart...

声 角笛

― 死者の月に寄せて ―

ラサール神父を想う

小緑教会出身
中村雪乃（旧姓・名富）

二〇二一年九月四日。沖縄県外で暮らす私のもとへ、ラサール神父様が帰天されたとの一報が入った。それはあまりにも突然すぎて言葉を失った。コロナ禍で沖縄には帰れない。最後のお別れはできないのかと落胆した。その後、通夜と葬儀ミサは



復活祭に子どもたちに囲まれて（2006年4月・黙想会）



ルイス神父とお得意のデュエット（2003年4月27日・献堂式の日に）



短冊を配るラサール神父（2006年お正月）

神父様方や修道者だけの参列になるらしいと聞いた時、真っ先に思い出したことがある。十六年前のことだ。

「葬式はしなくていいです。今七十五歳のお祝いをしてほしいのです！」

当時、小緑教会の主任司祭だったラサール神父様の誕生日は毎年教会でお祝いしていたのだが、二〇〇五年に七十五歳を迎えるこの誕生日だけは「どうしても盛大にやってほしい。わがままは承知です。お願いします！」と、いつになく真剣に希望してきた。アメリカでは七十五歳のお祝いは特別なものらしい。私達は「ダ

イアモンド・フェスティバル」と称して、神父様の希望通り盛大にお祝いすることに決めた。

当日は神父様を慕う方々が小緑教会にたくさん集まり、とても楽しい時間を過ごすことができた。神父様は「大満足です！葬式はしないでもいいからね、本当に」とあの元気な大きい声で、何度も笑って言った。いやいや神父様、お葬式もちゃんと盛大にやりますよ、なんて私達も笑って言っていたのに、まさか本当に盛大な葬儀ができないままお別れすることになるなんて思いもよらなかった。

神父様はあの日、記念カードを準備していた。表には、一九八八年当時の中高生と子ども達が作り上げた聖フランシスコのちぎりと絵（二〇〇三年、小緑教会が新築された時、真っ先に入口に設置した、神父様と子ども達との大切な思い出の品の写真、裏には「遺影にしましょう」と言っ

て小緑教会の庭で撮影していた自身の顔写真と共に、感謝の気持ちが綴られており、参加したすべての方々に手渡された。

生きていた元気な『今』のうちに、沖縄で出会った皆さんにどうしても伝えておきたい。まるで、今年このような事態になることをわかっていったかのように作られていた。見事なまでのお別れのカードだと改めて気づき、涙が溢れ出てきた。

ラサール神父様は今、ご自身がお魂込めで作られた小緑の納骨堂に入っている。十一月は死者の月であるが、神父様の誕生日でもある。十一月二日の死者の日に故人の写真を飾ると、死者の国から生者の国に帰ってこられるそう。

神父様、あの時遺影にしたいと言っていた写真を飾っておくので、ちょっとでもいいから我が家に立ち寄ってもらえますか。そして十七日の誕生日は、おめでたの電話の代わりに祈りを捧げながらお祝いしますね。

新しい「ミサの式次第と第一～第四奉献文」等の実施に向けて

教皇庁典礼秘跡省は、本年（2021年）5月23日（聖霊降臨の祭日）付で、日本の司教団から提出されていた以下の式文を認証しました（Prot.N.148/14）。「ミサの式次第と第一～第四奉献文」、「ミサの結びの祝福と会衆のための祈願」、「水の祝福と灌水」

日本司教団はこの認証を受けて、2021年度日本カトリック司教協議会第1回臨時司教総会（7月開催）において、これらの新しい式文によるミサを2022年11月27日（待降節第1主日）から実施することを決定しました。今後、上記の期日からの実施に向けて、各共同体で準備を進めることになりますが、そのための資料として『新しい「ミサの式次第と第一～第四奉献文」の変更箇所ー2022年11月27日（待降節第1主日）からの実施に向けて』が発行されました。この冊子には、改訂作業の経緯や基本方針などのほか、認証された式文の全文とおもな改訂箇所の解説が掲載されています。今後予定されている各教区における新しい式文の説明会や各共同体での勉強会などの機会にもご活用ください。（※情報を随時追加いたします。）

教区NEWS教会

耀きを放ちつつ(敬老の日)

宮古島平良教会

コロナ禍の続く今年も季節は変わらず廻り来る。当教会では九月十九日(日)七十五歳以上の方々がお元気でこの日を迎える事が出来た。

藤沢神父様が一人ひとりに祈りと祝福をくださり、神様への感謝を捧げた。「これまで教会の為に尽力し支えてくださった方々に感謝し、これから教会の土台となつて下さることを願います」。この心温まる神父さまの言葉を聞きながら、一人ひとり異なるけれども、それぞれのタレントを生かして老いゆく耀きを放つて行くに違いない。

最後に祈りのカード(最上のわざ)と紅白かるかんのプレゼントをいただき、喜びのうちに帰路に向かった。「おのれをこの世につなぐくさをすこしずつはすして・・・」(カードより)



シノドス開幕ミサ

開南教会

教皇による開会宣言後の十月十七日、シノドス(世界司教代表者会議)の開会宣言が、地方教会(教区)でも行われるよう要請があった。

那覇教区のカテドラルである当開南教会では、押川名誉司教が主日のミサを主式して、シノドスの開幕が宣言された。今回のシノドスは司教たちだけではなく、すべての信徒に呼びかけて、シノドスを全世界の教会のあるべき姿と捉え、「共に歩む」ようにと教皇様が呼びかけておられる。

二年の期間をかけて、「共に歩む」、「共に旅する」教会の実現を目指しているとの説明であった。シノドスの目指すところを共有して歩んで行きたいものである。

洗礼おめでとう

名護教会
二〇二一年五月十九日
幼児洗礼・レオ 宇久 嘉一

二〇二一年五月十九日
幼児洗礼・レオ 宇久 嘉一

二〇二一年五月十九日
幼児洗礼・レオ 宇久 嘉一

訃報

◆開南教会

カルメン 運天 春子 様

二〇二一年十月四日 享年八十五歳

◆与那原教会

ヨハネ 徳村 政安 様

二〇二一年十月二十三日 享年九十四歳

訃報

ユリアノ 西田 正 神父
(コンヴェンツアル聖フランシスコ修道会) 帰天



1993年の石垣教会を皮切りに、石川教会や泡瀬教会主任として15年間沖縄でご奉仕くださった西田正神父様が、去る10月21日、赴任地の長崎で、肺炎のため帰天されました。享年 75歳。神父様的那覇教区でのお働きに感謝すると共に、神様から豊かな恵みがもたらされるようお祈りいたしましょう。

NPO 法人ぶどう園の会



訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬典社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく

☎098-853-1059

